新年度となりました。引き続きよろしくお願いいたします。
三月という季節のせいでしょうか、生と死、現実と夢や幻想が入り混じるような作品が多かったように思います。

家出のちびっこ

木の頂に
一人乗りの三日月だ　　氷丸（茨城県）

一篇の詩が「家出のちびっこ」に「一人乗りの三日月」を用意してくれました。

ヒトの終わりは死ではなく
春なのではないかと思わせる風　　風船（東京都）

この風はこの間まで吹いていた身を縮こまらせる冷たい風ではない。春がやってきたのだ。その心地よさは、たましいがからだを抜けだして現世にないかのように思えるほど。

入道雲に
吸い込まれてしまいそうな
教室にいた　赤いうわばき　　藤ほたる（神奈川県）

窓の外には大きな入道雲。対して小さな教室のなかの小さな<私>。伏せた目に入ってくるのは自分のうわばき。語り手の心もとない気持ちが集約された小さな「赤いうわばき」の鮮やかな色が、教室のワンシーンをくっきりと蘇らせます。

冥王星のように
会えなくなる卒業　　広田　土（大阪府）

今まで毎日のように顔を合わせていたのに、“また会おうね”と軽く別れた級友と一生会わずじまいになることだってきっとある。卒業は級友を冥王星ほどに遠くする。

曇りのち時々晴れ
劇場版では誰かが死ぬでしょう　　あお（奈良県）

天候と同じく自分ではどうすることもできない“死”は、上映中の映画が必ずエンディングを迎えるようにいつか確実に訪れる。絶対にはずれない予報。

残像のミラーボールの棲む三月　　花澤　希海（千葉県）

夢とうつつがまざりあったような「残像のミラーボール」が朧の季節に似つかわしく、春の持つ華やぎと憂いの両面が伝わってきます。

春星を金平糖と決め付ける　　田崎森太（東京都）

「決め付ける」がいいですね。「金平糖」はそのかたちから星に例えられたりしますが、この作品は逆の発想。春の空気に潤んだ空にまたたく光が金平糖かもしれない世界はちょっと楽しい。

轆轤挽き海を象る遅き日よ　　田崎森太（東京都）

詩の言葉で目には見えないものを書き表そうとすることは、決して「象る」ことのできない「海」を象ろうとするようなことなのかもしれません。

蓮根も木蓮も消えて仕舞えばいい
活字に見透かされる浅はかな私は　　いまはじまるの（兵庫県）

「私」は“蓮”の字にどんな物語を持っているのだろう。文字は記憶を引きだすきっかけとなる。大切な人の名前だったり特別な思い出だったり、おそらく人それぞれに思いの宿る「活字」がある。

少しだけ経度と緯度が違うだけ
それだけで
雨のようなミサイルが降る　　小林紅石（埼玉県）

「だけ」の繰り返しに怒り、悲しみ、この世の理不尽への抗議の気持ちが感じられます。同じ作者の「人が爆破される衛星中継の／あと健康飲料水の CM 流れる」では、わたしたちの日常のありようが炙りだされていて、心が波立ちます。

透明な水槽にまたことばを放流　　im（沖縄県）

何度でも解き放ち、眺め育てて「ことば」は豊かになってゆく。そのためには心を「透明」にしていなければならないのだろう。

もしもし、おとん。
俺、俺。
桜が咲いたな。
上からやと、
よう見えるやろ。　　スズキセーホン（千葉県）

方言の語りかけが、明るくせつなく心に沁みる。美しいものを見ると大事な人と共有したくなる。あの世からこの世の桜はどんなふうに見えるのだろうか。

海底にいるかのような夜なべして　　鈴木　勝也（京都府）

しんと誰もが寝静まった夜の静けさと作業への集中のようすの両方を伝える「海底」。

ペキンと砕ける
日に焼けた洗濯ばさみ
全ての軽さの悲しみ　　高々（愛知県）

洗濯ばさみを指で開こうとしたときに、何の前触れもなく砕けることがありますよね、「ペキン」と。あの一瞬の驚きと手に残る感触と使いものにならなくなった洗濯ばさみの存在が「全ての軽さの悲しみ」という深さで表現されています。

春陰のアラベスクまた始めから　　藤田　ゆきまち（三重県）

曇り空のもと遠くから誰かのピアノの練習の音が聞こえてくる。曲は「アラベスク」。間違えては最初から弾き直す。その繰り返しが春の憂いを深めてゆく。

僧侶らの頭蓋さまざま花祭　　杢いう子（佐賀県）

僧侶の頭蓋に着目する面白さ。同じ法衣を身につけていても剃髪の僧侶はそれぞれの頭蓋のかたちの違いがはっきりわかる。煩悩を捨てた僧侶とて、各々の身体を持つ生身の人間なのだ。

沈丁花顔の掠れた社員証　　杢いう子（佐賀県）

長く会社勤めを続けているのだろう。勤めはじめて何回目の沈丁花の開花だろうか。沈丁花は小さくあまり目立たないが、早春に強い芳香を放つ花を咲かせる。匂いは記憶を呼び覚ます。これまでの自分の歩んできた道のりが思いだされたのかもしれない。沈丁花のひそやかなたたずまい、また、“沈”の文字からも、暖かくなりはじめた空気のなかでの物思いがじんわりと滲んでくる。

他にも印象に残るたくさんの作品がありました。
来月も楽しみにしています。